

病害虫発生予察特殊報第 1 号

害虫名：アルファルファタコゾウムシ *Hypera positica* (Gyllenhal)

発生作物：アルファルファ

1 発生経過

平成 18 年 6 月、独立行政法人中央農業総合研究センターが県下 11ヶ所を調査した結果、長野地域の千曲川堤防付近の 2 地点の雑草（カラスノエンドウ）で本虫を確認したとの情報提供があったが、農作物についての実害は確認できなかった。

平成 19 年 5 月、長野地域の飼料作物畑で害虫の食害症状が確認され、5 月 16 日に対象虫を現地にて採取し、東京農業大学農学部小島准教授に同定を依頼したところ、アルファルファタコゾウムシであることが確認された。また、東北信地域の千曲川河川敷を中心にカラスノエンドウを調査した結果、同様の害虫の寄生がみられ、同定を依頼したところ、平成 19 年 6 月 7 日に同種と確認された。

本種はヨーロッパ原産の侵入害虫で、1982 年に福岡県、沖縄県で初確認以降、全国的に分布が広がっている。近県では、1988 年に愛知県、1999 年に岐阜県、2001 年に東京都、2003 年に茨城県、神奈川県、群馬県、静岡県、2004 年に千葉県で確認されている。

2 形態

成虫の体長は 4.0～6.5mm。体表は灰色がかった褐色の鱗片に密に覆われ、背面中央により濃色となっている。

幼虫の孵化直後は約 1.3mm と非常に小さく、体色はほとんどが無色透明であるが、成熟にともなって体色は乳黄色～濃緑色を帯びる。老熟幼虫の体長は約 10mm で、背面中央に明瞭な白い条線がある。頭部は黒色で、脚はなく、腹部に発達した突起がある。幼虫は植物体上に白いレース状で円形の繭を作り、その中で蛹となる。

3 生態と被害

年間 1 世代の発生である。幼虫は 3 月頃から孵化して寄种植物（主にマメ科植物）の茎葉・花を食害し、4 月頃に発生のピークを迎え、4 齢を経過した幼虫は繭を作って蛹になる。新成虫は 5 月上旬頃から見られ、5 月中旬～6 月上旬が発生のピークである。羽化した新成虫は約 10 日後に休眠（夏眠）には入り、晩秋（11 月上旬）まで休眠が続く。休眠場所は石の下や樹皮の裏などと言われているが、詳細は不明な部分が多い。休眠から覚醒した成虫は約 1 ヶ月間摂食した後に交尾を行い、マメ科植物などの茎に、12 月頃～5 月上旬まで産卵を続ける。産卵数は雌成虫 1 頭当たり約 1000 個である。

寄种植物は、レンゲ、アルファルファ、シロツメグサ、カラスノエンドウ等のマメ科植物である。被害は幼虫による寄种植物の茎葉や花の食害が主である。また、新成虫が高密度に発生し、レンゲ等の枯死や耕起された場合やハウス内の密閉環境では、ソラマメ、ダイズ、インゲンマメ、エンドウ、キュウリ、メロン、ジャガイモ等も加害する場合もある。

4 防除対策

- (1) 耕種的防除法として、新成虫が発生する前（4 月頃）に寄种植物を完全に収穫・除草をするか、耕起・湛水して幼虫を死滅させる。
- (2) 薬剤散布は、幼虫発生期（3～4 月頃）に行う。なおレンゲ等では養蜂業者が採蜜している場合もあるので、連携をとり薬剤散布については十分に配慮する。

表1 アルファルファタコゾウムシ又はゾウムシ類に登録のある薬剤

薬剤名	作物名	希釈倍数	使用時期	使用方法	使用回数	総使用回数
トクチオン細粒剤F	れんげ(緑肥用)	6kg/10a	開花前	散布	1回	1回
ディプテックス乳剤	まめ科牧草	500倍	収穫45日前まで	散布	4回以内	4回以内
スミチオン乳剤	まめ科牧草	1000~2000倍	収穫14日前まで	散布	2回以内	2回以内

(平成19年(2007年)5月31日現在)



図1 成虫



図2 幼虫



図3 繭



図4 蛹